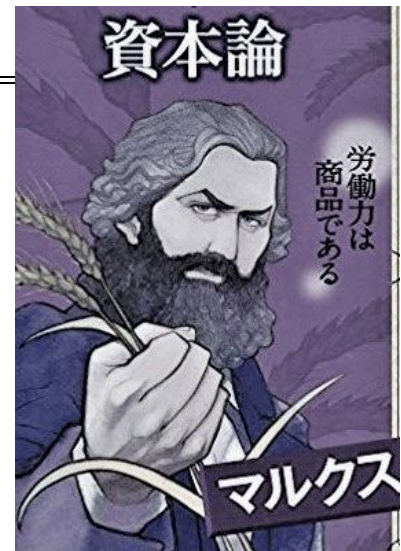


『資本論を読む会』第3回目の案内！

【第3回】2018年11月29日(木)午後6時から
会場：支局・社青同事務所において

◎一緒に読む人、募集中です。
2回目は9名が参加(30代の新人2名も)



10月25日(木)の第2回には、9名が集まりました。新しく30代の若者が二人参加。平均年齢のバランスもとれてきたみたい。当日は、都合により参加できないと返事を頂いたのは7名。今回は「第1節 商品の二要素」(67-78p)を読み合わせ、レポートに基づき質疑討論しました。当日のレポート、参考辞書、添付資料(マルクス・エンゲルス年史、産業革命の時代区分)等は、支局のホームページに収めてあります。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」コーナーにあります。

レポーターから

- 人間は昔、「自分で生産」して「自分で消費した」。資本主義では、ほとんどすべてが「商品」として生産される。これが資本主義の最も特殊な所。だから、商品から分析を始める。
- 「商品」が実際に持っているものは、「使用価値」(質)と「価値」(量)。
- 「使用価値」は、「人間の欲望を満たす」、商品それぞれが持つ様々な「有用性・効用」。それは具体的な形状からもたらされるから、商品や商品のその属性自体も「使用価値」と呼ぶ。
- 「価値」は、まず、「交換価値」(2商品間の交換比率・価格)という「現象」で現れる。異質な使用価値が「等しい」という現象は、両使用価値とは異なる同質の「第三のもの」が、「同量」あることを示しており、それが「価値」である。
- 使用価値・効用は「具体的な自然的実体」だが、価値は「抽象的な社会的実体」であり、使用価値・効用は一切含まない。
- 価値は「第三のもの」(等しい質)の「ある量」だが、それは次のように決まる(規定)。
 - ①：「質」としては、⑦人間の「抽象的労働」、が、④商品に「対象化・結晶」したもの。
 - ②：「量」は、「抽象的人間労働の労働時間量」で測る。
 - ③：「抽象的人間労働」とは、個々バラバラの労働ではなく、「社会的平均的同一労働」。その労働で生産する場合の、「社会的に必要な時間」が、「価値の量」である。
 - ④：「社会的必要労働時間」が価値の量となるが、「社会的必要」とは、現存する社会での、⑦正常な生産条件、④正常な労働の熟練と強度、を使う場合を前提としている。
- こうして決まる価値は、固定された量ではなく、生産条件(労働者の熟練・科学の応用・協業分業・生産手段の規模・自然環境の影響等)の変化と共に増減する。
- 以上から、商品価値の量は、「労働の量に正比例」し、「生産力に反比例」するという基本的特徴がある。同一時間に生産される商品量が増えると、1商品当りの価値量が減少。
- その他の注意点
 - ⑦価値ではないが使用価値であるもの：労働を含まない自然物。空気・処女地・自然林等。
 - ④有用な生産物だが商品ではないもの：自分で生産して、自分で消費するもの。共同体の内部消費や封建制農奴の自家消費、資本主義での兼業農家の自家消費、等。
 - ⑦「商品生産」に必要な二つの社会的条件：④他の人のための使用価値を生産するという「社会的分業」、⑤他の人に交換によって譲渡しなければならないという「私的所有」。
 - ⑤最後に、「使用価値・効用のないもの」の労働は無効であり、価値を形成しない。

※何の前提もなく始まる、この「1節・2節」あたりは、用語や「簡単な1文」自体が難解ですが、あと少しなので頑張りましょう！次回は第2節(78p～)です。【Takより】

◎参加希望の方は事務局または発起人までご連絡ください。
※資料コピーの関係がありますので…